

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 30 日現在

機関番号：30105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370222

研究課題名(和文) 博覧会の時代と泉鏡花

研究課題名(英文) Izumi Kyoka -The Era of the International Exhibition in The 19th Century

研究代表者

種田 和加子 (TANEDA, WAKAKO)

藤女子大学・文学部・教授

研究者番号：90171868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：泉鏡花のバックグラウンドとして彫金師の父泉清次がいかに関与し、影響を与えているかを解明した。まず、清次がウィーン万博に和泉政久の名前で「花器」を出品している可能性の高さと、ニュルンベルク金工博覧会に「香炉」などを出品していたことをつきとめた。ウィーン万博の「花器」は、謡曲で名高い「海士ノ玉採り」を象徴したものである。清次が輸出工芸時代に制作したものは、たしかな技術とジャポニズムが直結したものである。同時に、鏡花と能の結びつきは母方のみならず、父からの摂取もある。鏡花作品に父を源流とした職人や工芸品が多く登場しており、「模様」「デザイン」の面からの父の影響は大きい。まさに博覧会時代の所産である。

研究成果の概要(英文)： I focused on Izumi Seiji, He was chaser in Kanazawa. Most of his works were made to world's fair and exoptation in the late 19th century.

I investigated Die Internationale Ausstellung von Arbeiten aus edlen metallen und legirungen in Nurnberg 1885. I identified his works in the special catalogue that was published in Munich at that time. He made one koro and one vase. Moreover in the world exhibition Vienna 1876, It is quite likely that Seiji made on vase in laid work of Ama(Noh-play, Fisher girl's story) as name of Izumi Masahisa. Seiji's works specially held influence on his son Izumi Kyoa. The influence mirrors a state of the world's fair. It is importante to analyze Seiji's pattern in relation to Kyoka's imagination.

研究分野：日本文学

キーワード：博覧会 ジャポニズム 金工史 職人 謡曲 物語

1. 研究開始当初の背景

泉鏡花の父清次は、鏡花の父であるという面から、つまり鏡花の評伝にあくまでも関係づけてこれまで研究されていた。しかし、国際的な博覧会、たとえばウイーン万博やフィラデルフィア万博に出品していた可能性にはいまだ注目されていなかった。また鏡花の遺品にあったニュルンベルク金工万国博覧会のメダルについて清次が何かを出品していたはずであるがその点も目がむけられてこなかった。鏡花も、「三越」のPR誌「月下園」に作品を発表するなど博覧会の余波である勤工場から発展したデパート文化(近代の消費システム)にかかわりをもっている。清次が制作したものが多く輸出工芸品として外国にわたっているので国内に存在するものは少ないが、それでも、輸出工芸時代の意匠を反映するものが最近目にするようにできようになってきた。工芸は「美術」の分類区分ではつねに流動的であいまいな位置を与えられてきた。鑑賞と実用の両面をもつことがそうさせてきたといえる。鏡花もその文体は高く評価されながら、新派悲劇の作者として、「大衆的」「通俗性」へのひろがりがかえって「純文学」からは遠ざけられてきた感がある。その点では、美術史における「工芸」と相似的關係にある。しかし、近代文学がともすれば周辺においてきた「物語」、まさに「モノ」が語る世界こそ鏡花の本領であった。近代文学と、美術史の相関関係を清次と鏡花において照射するところみは、いまだなされておらず、なされるべき課題であった。

2. 研究の目的

(1) 泉鏡花と父である彫金師の泉清次を「博覧会」という「近代のディスプレイ」のなかにおき、両者の共鳴しあう要素を考察する。それは、工芸と文学、それぞれのジャンル概念形成の黎明期に立ち会った父と子の位置を文化史、政治史、美術史、文学史にまたがって考察することでもある。

(2) 上記の考察によって鏡花の想像力にいかにか父清次の彫金師(職人)のいとなみが関与していたか、その影響を具体的に論証するが、そのみならず相互に共通する世界観(思想、美意識)をも確定することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 鏡花の父であるということのみでなく一彫金師泉清次の仕事をこれまで注目されてこなかった博覧会に焦点を絞り文献・資料収集、現地調査を通して特定・考察した。

(2) 江戸後期から明治前期にかけての「美術」のジャンル編成の動きのなかで清次の位置をはかり、また、鏡花の「職人小説」にでてくる職人たちが一様に「美術家」ではないという立場で描かれる理由をさぐった。

(3) 江戸後期から明治初期の工芸品(金属工芸)に共通しているのは、伝承・工夫の所

産である特殊な技術によって細密にモノや物語性を象嵌することであり、清次も例外ではない。また残された下絵には「亀」や「鶴」のデザインがある。この源流(流派)について可能な限り調べることが要請される。鏡花と清次をつなぐ「模様」あるいは「模様化された物語」への意識を博覧会の美術の傾向やジャポニスムの特性から探った。

4. 研究成果

(1) 泉清次が、ウイーン万博に「和泉政久」という工名で、「海土ノ玉採り」の場面を象嵌した花器を出品していた可能性が博覧会関係の資料により濃厚になった。また、ニュルンベルク金工万国博覧会に関しては、この博覧会の唯一の研究者であるシビル・ギルモント氏の研究に多くを負う。2014年2月にバイエルン州立図書館とニュルンベルクのゲルマンナショナルミュージアムにての資料収集をおこなった。同図書館所蔵の「スペシャル・カタログ」によって清次が「香炉」と「赤銅の鉢」を出品していたことが文献上はわかったがその詳細はわからない。ただ、金沢の工人が制作したと思われる「鶉の籠」の作品の画像はあった。清次は金沢の同僚の工人たちと同等の技量をもってこの博覧会に臨んだことはこれによっても知られるだろう。このカタログと数少ない画像によって、博覧会で注目された「龍神」(宝子山宗珉作)と能の龍神(玉井)との類似性など、図像化された「能」は「応用美術」としても流布していたことがわかり、明治前期の能と図像の問題が浮上した。これは独立したテーマとして、2015年6月に日本比較文学会で発表した。その際、原田直次郎がこの博覧会をみた可能性が指摘された。

(2) 清次の制作した輸出工芸時代の所産と思われる「鶴亀図大盃」の「亀」の意匠は、東京芸術大学附属図書館所蔵の「頭書増補訓蒙図彙」の「みのがめ」に酷似しており、これは17世紀に中国から日本にはいつてきたという研究があり(林晃平「浦島伝説の研究」2011年)、彫金の意匠や下絵のすそ野は相当に深く広い源流をもつということが判明した。

(3) 泉清次の作品は、国内の収集家や一般家庭などに所蔵されていまだ公開されていないものも多くあると思われる。その点において、金沢の泉鏡花記念館の協力をえて、「北國新聞」を通じ、埋もれている清次作品を収集するよびかけをおこなうことに至った。鏡花記念館館長の秋山稔氏、学芸員穴倉玉日氏(研究協力者)の働きかけが大きい。これは2014年11月1日の「北國新聞」に「記念館が情報を収集」と題した記事として掲載された。

それに連動し、研究代表者種田は、「泉鏡花と彫金師泉清次」の一文を、「北國新聞」同年12月4日号に寄稿した。

(4) 泉鏡花の唯一の翻訳作品の「沈鐘」(戸

張竹風との共訳、明治40年)を子細に読むと、中世ドイツの高名な彫刻家(ニュルンベルクの出身、金属にもかかわる)の「金彫」の名作が主人公ハインリヒの部屋を飾っているという場面があり、「Bildwerk」を「金彫」とするのは卓抜な訳である。「沈鐘」は鏡花と清次をニュルンベルクで結びつける唯一のつながりである。「金彫」については戸張竹風の知識もあるだろうが、鏡花の教養には、このような父の系譜につながるなんらかの素養があったとおもえ、さらに追及すべきことである。このように比較文学・文化の視点が生まれたことは予期していなかった。これまでハウプトマンと鏡花については、「戯曲」の面からの影響関係のみが論じられていたが、ハウプトマンのこの鋳鐘師の物語には鏡花世界との共通性が多々あり、「草迷宮」(明治41年)の最後の天上と魔界の世界観にも相当な影響を与えていると見られる。

(5) 鏡花が父をモデルにした「蟹の一心」(明治28年)とそこに登場する「親亀子亀」の細工物についてはこれまでその意匠が実在することが指摘されてきていた。父親と製作されたものが明確な作品(鏡花の遺品や遺族の証言)以外でも、「河伯令嬢」(昭和2年)では海外から注文をうける彫金師の瓜の細工、「ピストルの使ひ方」(昭和2年~3年)には「地球儀」型の香炉といったように、博覧会やその流れをくむ輸出工芸の意匠と合致するものがあり、「紋様」「装飾性」についての鏡花の知識・関心の深さがわかる。職人小説の系譜につながる「さゝ蟹」(明治30年)では広常、「ピストルの使ひ方」では近常と「能」の「小鍛冶」の主人公宗近を思わせる命名があり、また「蟹の一心」や「無憂樹」(明治39年)には謡曲「小鍛冶」からの引用がある。彫金師(ほかの職人)と能との密接なつながりは、金沢の文化として江戸期からあったもので、そういった歴史的事実も確認できた。つまり、鏡花文学の基盤として必須である能が母方からの継承であることは明白だったが、父方からの摂取も強調すべきである。近代化によっていったん途絶えたかにみえた「能」は、鏡花の職人小説においては途絶えることなきものとして、「小鍛冶」宗近の継承者として彫金師は把握されていた。

(6) 博覧会時代に盛んであった細密工芸を小説の「文体」のアナロジーとして考えると、鏡花の文体はモノ尽くしの傾向が強くあり、これが独特の反復性をもったとき、怪異と結びつく。「河伯令嬢」などはその例であり、ここからは、鏡花のバックボーンとしての清次から離陸して、鏡花文学(表象)の問題として「文字」の反復性それ自体を考察する地点にたつた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

種田和加子 泉清次と泉鏡花 博覧会の時代 「藤女子大学文学部紀要」査読なし 第53号 2016年 pp.25 - 41

種田和加子 物語る紋様 泉鏡花と泉清次 「アナホリッシュ国文学」 査読なし 6巻 2014年 pp.4 - 13

〔学会発表〕(計 3 件)

種田和加子 明治初期金工作品への謡曲の絵画的応用 日本比較文学学会 2015年6月15日 立命館大学(京都)

種田和加子 泉鏡花と泉清次が共鳴する空間にむけて—博覧会・職人小説・意匠 泉鏡花研究会 2015年7月26日 昭和田女子大学(東京)

種田和加子 博覧会の時代と泉鏡花 日本比較文学学会北海道支部 2013年7月6日 藤女子大学(札幌)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

種田和加子 (TANEDA Wakako)
研究者番号：90171868
藤女子大学文学部・教授

(2) 研究分担者

乾淑子 (Inui Yoshiko)
東海大学国際文化学部・教授
研究者番号：

40183008

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

穴倉玉日 (ANAKURA Tamaki)